古道調査・秩父往還（贄川宿～猪鼻～強石）下見調査報告書

2021.10.21

日　時　：令和３年10月10日（日曜日）

メンバー：L.松本敏夫、小原茂延、宮崎　稔、野口勝志、轟　涼、宮川美知子、小島千代美
浅田　稔、本村貴子（計９名）

10月10日（日）：曇り・一時霧

コース記録：

秩父鉄道・三峰口駅（9:30 - 9:40）～白川橋(9:50）～秩父ジオグラビティパーク（9:58）～権田沢（10:02）～国道140号と皆野両神荒川線Ｔ字路交差点（八幡渡しへの分岐）（10：07）～車道左に石仏群（10:12）～八幡大神社(10:15)～八幡渡し（10:16）～国道140号交差点（10:26）～石仏・石碑群（10:34）～御堂鐘地蔵尊（10:51）～贄川宿（逸見家）・三峰神社の「一之鳥居」跡（10:54）～贄川バス停（小鹿野町営バス）（11:00）～道標「たつみちざか」（常明寺分岐）（11:02）～御岳山登山口・常明寺分岐及び道標「三峰口駅 900m13分・神明社1.2km18分－阿弥陀寺1km15分・下郷熊野神社2.1km」(11:06)～常明寺(11:08)～贄川宿（11:18）～小櫃醫院（11:19）～油屋「木製道標（贄川宿・油屋－秩父往還－八幡渡し五丁)」(11:22)～町分公会堂（11:24）～御岳山登山口／贄川宿観光トイレ（11:25）～贄川宿入口の説明板（11:32）～白川橋（11:38）～熊野神社入口・庚申塔（11:51）～熊野神社の鳥居・石段（11:55）～熊野神社（11:58－12:36）～鳥居前を右折し旧秩父往還から国道140線(12:49)～白滝沢工事現場の広場(12:55)～広場奥に旧秩父往還の入口(12:56)～白滝沢に架かる橋が破損し、沢を渡渉（13:02）～土壇場地蔵（13:08）～旧秩父往還が消失による古道探索（13:10～13:30）～国道140号（13:40）～交通安全地蔵尊・馬頭観世音石碑・牛頭尊等石仏多数（13:44）～「強石区」標識（13:47）～高野林太郎顕彰碑（林学博士・本多静六撰幷書）（13:48）～強石げんきプラザ・瀧石神社（13:50）～道標「御岳山－強石バス停」を左折・強石地区へ（14:00）～国道140号手前を右折（14:02）～大滝発電所の送水管２本を渡る（14:09）～国道140号・道標「強石集落を経て強石バス停方面」及び「大達原大輪方面 - 強石バス停方面」(14:13）～遊歩道入口に標識「大達原方面」及び「大血川・大輪方面－強石方面」(14:17）～光の村養護学校・標識「林道大達原線起点」(14:23）－地元会員の車または光岩バス停から西武観光バスで三峰口駅（15：00）

記録

日本山岳会・山岳古道調査 PT から選出された第一次山岳古道調査対象は「雁坂峠越え」及び「十文字峠越え」です。よって、埼玉支部の山岳古道調査プロジェクトでは、共通部分である旧秩父往還から調査を開始しています。また、現在は第二次山岳古道調査対象の候補として「三峯参詣道」及び「奥武蔵古道」を山岳古道調査 PT に推薦中です。埼玉支部では既に、旧秩父大宮から栃本（川又）に至る旧秩父往還のうち、大久保地区（宮平までの区間未調査）から麻生（二瀬ダム)、上中尾、栃本間の下見調査を実施済です。今回は、贄川宿

から猪鼻・強石（国道 140 号沿いの旧道調査を含む)、杉ノ峠を経由し、落合までの旧道調査を計画しました。

新編武蔵風土記稿に「贄川宿　此所は江戸より甲州への道筋にて、町と唱へるあたりは、左右に屋並みそろひて卅六軒ありて、・・・水旱の患は本より山間の土なれば、雨多ければ作物實登りあしく、旱すれば痛み易し、爾のみならず、猪鹿多く作物を荒して、いと艱難せり、」と贄川は農耕には適さないが、甲州への道筋に当り秩父往還の両側には 36 軒の家並が連なる交易・三峯講・秩父巡礼などで栄えた宿であったことが推察されます。また、幸田露伴は、明治 31 年 8 月に熊谷経由で秩父往還を辿って三峯神社を詣でた際に「知々夫紀行」を著し、その中で「贄川は、後に山を負い前に川を控えたる、寂びたる村なれど、家数もやや多くて、蚕の糸ひく車の音の路行く我らを送り迎えするなど、住まば住み心よかるべく思わるるところなり。」と養蚕・機織りが盛んで、住みやすいところと好意的な印象を記しております。下見調査の目的の一つは、交通量が多く道幅の狭い国道 140 号沿いの旧道（歩道）を歩いて猪鼻や強石に向かうことが現実的かを確認することも含まれます。

趣のある駅舎を今に残す秩父鉄道・三峰口駅を出発し、左手に商店街の町並み、右手に駐車場を、前方に秩父御岳山から派生する尾根を眺めながら、歩道を進むと白川橋につきます。

三峰口駅

三峰口の街並み

白川橋

荒川の雄大な景色を眼下に見ながら橋を渡ると国道 140 号に突き当たります。左は大滝方面、右は秩父方面です。右手の贄川宿への分岐には歩道橋が架けられ、国道右には最近人気の秩父ジオグラビティパークが荒川を横断しています。直進して権田沢を越えると国道の向かい側は秩父警察署・三峰口駐在所があり、パトカーが 1 台駐車していました。

贄川歩道橋

秩父ジオグラビティパーク

三峰口駐在所

国道と皆野両神荒川線との交差点（T 字路）を右折して「八幡渡し」へと急な舗装道を降ります。車道左に古い馬頭尊 4 基（その内 1 基は文化十五年銘）と文字塔 1 基があります。なお、写真のキャプションにつけられた（No.・・・）は「歴史の道調査報告書・秩父甲州

往還」（埼玉県教育委員会）に記された史跡・文化財等 No.に一致します。その先の左手に八幡大神社の木製の神明鳥居や社殿に登る石段があります。社殿の前に「本日は、八幡大神社にご参拝いただき誠にありがとうございます。ご参拝のしるしにご朱印をおうけいただく方は一枚 500 円お納めいただきます。左側をごらん下さい。大きなけやきがあります。推定樹齢 400 年以上と言われています。二本の木が一本となっているところから夫婦けやきと昔から崇拝をいただいております。本日はご参拝いただき誠にありがとうございました。八幡大神社」の張り紙があり、箱に納められたご朱印が置かれていました。「八幡渡し」や「八幡坂」はこの神社に由来するものと考えられます。

八幡大神社の境内には御神木の大きな夫婦欅（御神木の前に、縁結び・身体健全・諸願成就の説明板）があります。一方、「地図で歩く秩父路」には「神社は贄川村の名主小櫃家の先祖が氏神として勧請し、明治五年に村社、昭和三九年に本殿を新築した。10 月 5 日の例大祭には地芝居があり、『長旗付き煙火』が行われた。」と由来が記され、地元の人達にとって、祭りが盛大に挙行され楽しまれていたことが分かります。

国道 140 号の T 字路交差点

八幡坂

石仏・石碑群（718）

八幡坂を下ると目の前が荒川ですが渇水期のためか水量は僅かです。ここは白川橋が架けられる以前は白久と贄川とを結ぶ荒川の渡船場があった場所で「栃の木の渡し（秩父甲州往還を参照）」または「八幡渡し」があったとされる荒川の河原です。風土記稿には「渡船場　荒川の渡にて、當村及び白久村にて、隔日に村夫を出して渡船せり、冥加永とて年々一貫文を上納せり、」と村人の役割と税を徴収されていた様子が分かります。また、荒川村誌には「荒川は秩父に高峻な V 字谷を作り、対岸に長い橋を架けることは不可能であった。そのため荒川本流は通行人が川越しするか、あるいは渡船に頼らざるを得ない。・・・荒川村には江戸時代二ヶ所の渡船場があった。その一つが久那村柏木（現秩父市久那）より上影森村までの荒川と浦山川の合流点にあった渡船場、もう一つは白久村の栃の木坂を通り贄川の八幡社に至る渡船場である。」とあり、船賃は荒川の水量により五文から十二文と記されていますが、村人や商人、武家からは取らなかったようです。残念ながら「八幡渡し」に関する標識や説明板は残されていません。

八幡大神社（718）　　八幡大神社の夫婦欅　　荒川の「八幡渡し」跡

国道のＴ字路交差点に戻り、交差点を横断歩道で渡ると、皆野両神荒川線（小鹿野町への車道）の西側に舗装された旧秩父往還が残っています。旧秩父往還の右側には石仏・石碑群（地蔵尊、二十二夜塔、奉納大乗如典六十六部廻国供養塔（享保十一年銘））などが残されていて、旧道の面影を今に伝えています。古道を左側に緩やかにカーブしながら登ると贄川宿の東端の逸見家（「秩父往還いまむかし」に「角屋」と記されています。）の前に出ます。三峯神社の「一之鳥居」が大輪に移される以前はここに設置されていたと伝えられる場所です。

石仏・石碑群（721）　　旧秩父往還　　逸見家

ここから旧秩父往還の両側に、贄川宿の古い街並みが続きます。途中、右折して小鹿野町方面に進むと分岐に立派な御堂鐘地蔵尊が祀ってあります。傍らの説明板には「みどうがね御堂鐘地蔵尊の由来　江戸中期以降、秩父三十四ヶ所霊場の巡礼は最大のにぎわいを見せた。宝暦元年（1751）八幡の渡し（荒川の渡し船）が始まると贄川宿は旧秩父往還最後の分岐点として三峯神社参拝や札所巡礼を始め、一般旅人でおおいに賑わった。宿場から札所三十一番へは山道となり、柿平峠を越えて古池、両神を通る三里（十二キロ）の道程である。宿場の人達は難儀する巡礼の道標として此処から六町（六百メートル）先の山道に享保十三年（1728）庚申塔を二基建て『庚申信仰』と旅人の道中安全を祈った。塔には贄川町とあり、当時の宿場の盛況が偲ばれる。宝暦七年（1757）お庚申様と共に当時民間信仰の中心のお地蔵様がこの地に建立され、地名も『みどうがね』と呼んだ。地元民はもとより、近隣近郷の人、旅人は『地蔵十福」を祈願、その功徳ご利益は今に数多く言い伝えられている。現代交通の発展により古い山峡の巡礼道は廃れて行く運命にあるが、今回先祖、先人が崇め敬った御利益多い『みどうがね地蔵』と『みちしるべ庚申塔』をこの地にご遷座し、現在の交通地獄、受験地獄、長寿と健康管理等、悩み多い世相の守り本尊として厚い信仰を継承する。平

成七年秋彼岸、町分区、贄川宿保存会』と記されています。贄川宿は小鹿野への分岐にもなっていて、かつては地蔵尊や庚申様の加護が頼りの旅だったことが理解されます。

贄川宿街並み　　小鹿野への分岐　　御堂鐘地蔵尊

贄川バス停（小鹿野町営バス）を過ぎると道標「たつみちざか」が右側にあり、常明寺や秩父御岳山への分岐です。民家の間にある狭い「たつみちざか」を登ると「御岳山登山口・常明寺」分岐があり、左折すると道標「三峰口駅 900m13 分・神明社 1.2km18 分ー阿弥陀寺 1km15 分・下郷熊野神社 2.1km32 分」及び「御岳山登山口」があります。ここを右折して御岳山登山口方面の常明寺に向います。リヤカーや大八車などと共に夥しい数の人形（贄川宿は『かかしの里』と言われている。）が広場に並べられ、開放的な空間を進むと樹林に覆われた常明寺につきます。

超人として知られる即道の「終焉の地」の説明板には「即道終焉の地　秩父市指定史跡 即道は享保年間上田野糀屋の薬師堂から贄川のこの地に移住し、真言宗蓮台山常明寺の三世の僧となった。常明寺本尊は阿弥陀如来、また地内には台石に即道の筆跡が刻んである宝篋印塔も残っている。修験・苦行によって、絶倫なる体力を養い、仏道・書学を習得する他、彫刻にも逸品を残した超人的スーパーマン即道の生涯であった。享保十五年（1730）九月七日、即道は鐘を打ちつつ、一本の杖を棺内に残して入定したと言う。享年四八歳であった。即道の墓は常明寺周辺墓地の上限にあり、奇人即道を物語るのにふさわしい奇形をしている。 即道作の村指定文化財　薬師如来坐像・上田野糀屋・薬師堂、薬師如来立像・上田野坂口・薬師堂、石経塚・爪彫り石・上田野糀屋、　秩父市教育委員会」と記され、多彩な能力の持ち主であり、修験者としても活動したと推測され、旧荒川村の村民に愛された即道の業績が述べられています。また、傍らの見事な宝篋印塔に驚かされます。

「たつみちざか」標識　　常明寺と即道終焉の地（722）　　宝篋印塔

贄川宿に戻り、歴史を今に伝える小櫃醫院の佇まい、油屋（木製の道標に「贄川宿・油屋

－秩父往還－八幡渡し五丁」と記されている)の前には「贄川宿の街燈　大正時代の贄川宿には、『角屋』、『逸六』、『新井屋』、『逸八』、『油屋』、『丸太』、『逸忠』など 10 軒ほどの家に街燈があり、夕ぐれ時になると一斉に灯がともり、旅人を和ませていました。」と説明書が繁栄を極めた当時の街燈と共に残されています。

小櫃醫院

贄川宿の調査（街燈前）

町分公会堂

町分公会堂、御岳山登山口／贄川宿観光トイレなどを過ぎると贄川宿の西端であり、入口に大きな「贄川宿」の標柱や贄川宿の街並みを記した説明板が設置されています。そこには「贄川宿　秩父甲州往還を白久側から渡船場を越え、八幡坂を登ると贄川宿に着く。新編武蔵風土記稿に『此所ハ江戸ヨリ甲州ヘノ道筋ニテ左右ニ家並ソロヒテ卅六軒アリ、寛文七年ヨリ毎月二七ノ日ニ市立セシガ・・・』、贄川宿は大宮郷（秩父市）に次ぐ秩父甲州往還の宿場で、三峯社講中・諸国商人衆の定宿として、江戸初期から賑わいを見せていた。また宿の立地が上信や甲州への分岐点であったことや物資の集散にも好都合であったため、六斎市や雛市も開かれた。贄川宿の家並みは往還に沿って短冊状で、旅籠、酒屋、質屋、紺屋、豆腐屋などがあり、他にも医師、髪結い、荷継場などがあった。この贄川宿には、秩父の地質調査に来日したナウマン博士や宮沢賢治、そして明治の文豪幸田露伴も立ち寄り、いずれも東方の眺望を絶賛している。　秩父市教育委員会」と交易や信仰及び学術調査などで賑わった贄川宿の歴史が記されています。

贄川宿観光トイレ

贄川宿の説明板

国道 140 号と白川橋交差点

贄川歩道橋で国道 140 号を越え白川橋にもどります。旧秩父往還は国道の少し北側にあったはずですが、国道拡張工事のためか、民家の前まで高い壁とフェンスが覆い、「秩父往還いまむかし」に記されていた旧秩父往還の痕跡は確認できませんでした。

白川橋から大滝方面に向かう国道 140 号の左側に幅 1m程度の歩道スペースがありますので、小人数ならばそこを歩くことが可能と判断しました。自動車に注意しながら大滝方面に進みます。国道の少し南側の街並みの中に、「秩父往還いまむかし」に記された旧秩父往

還を探しましたが残念ながら確認できませんでした。猪鼻に入ると間もなく西武観光バスの荒川局（元猪鼻郵便局）前バス停があり、以降は歩道スペースがほとんど無くなり、通行する車両に注意が必要となります。バス停から数分で国道右側の熊野神社入口につきます。国道を横断すると右側に標識「上ノ沢」と「甘酒まつり」碑や庚申塔があり、右折すると熊野神社への参道です。

「上ノ沢」の橋を越えると熊野神社の木製の立派な鳥居（扁額に「鎮護」）があり、右側の石段横の甘酒まつりの説明板には「甘酒まつり　県選択無形文化財　猪鼻熊野神社縁起によれは、日本武尊が東征の際に当地で大猪を退治し、尊もこのことを神の加護と思し召し、当地に熊野神社を祀り、矢を奉納した。また、里人も尊の徳に感激して濁酒を差しあげ、その労をねぎらったという。天平八年（736）疱瘡が流行った際、尊に濁酒を捧げた故事に因み、甘酒まつり疫病流しの祭事が始まったといわれる。七月の第四日曜日の大祭当日、夜を徹して“カツコミ”番が造った甘酒の大樽が境内中央に置かれる。続いて午後二時祭典終了後広場での祈願が済むといよいよ甘酒まつりの始まりである。樽番の制止にもかかわらず、あちこちで小桶に汲まれた甘酒の掛け合いが始まる。そうなると裸になっている者には誰かまわずかけあい、境内には甘酒のしぶきが飛び散り、叫びや笑いが一緒になって興奮のるつぼと化す。甘酒がなくなると今度は樽をころがしたり、かついだり、最後には樽を池に放り込み、余勢をかって区の役員も池に放り込んで祭りの成功を祝い合う。　秩父市教育委員会」と記されています。古池の猪狩神社と同類の日本武尊伝説が残され、牛頭天王の悪病除けも混在している様子で、民間信仰の力強いエネルギーが感じられます。

国道 140 号

「甘酒まつり」碑や庚申塔

熊野神社への石段

急で狭い石段のため手すりを頼りに一気に登ると熊野神社の社殿前に出ます。社殿の前の説明板には「甘酒祭り、埼玉県選択無形民俗文化財、由来、江戸時代中期、享保十五年（1730）源清信が書いた『熊野大神縁記』によると、景行天皇の時代、日本武尊が東征の折、甲斐の国から三峰山に入り、下山の途中大猪が前を横切り、これを射止めた所、猪ではなくこの地を荒らしていた山賊であった。里人は大変よろこび、尊に濁り酒を献上した。尊は山賊を退治できたのは神々のおかげであると、この地に熊野神社を祭り、矢を奉納した。その後、天平八年（736）疫病が流行したので濁り酒を甘酒に変え、それを祈願し裸でかけあい、疫病流しとして始めたのが甘酒まつりの起源と伝えられている。この祭りは、祭りの前日、麦と麹で甘酒を作り、当日祈願が行われ、参詣客に悪病除けとして振舞った後、氏子が素はだにふんどし一丁のワラジばきで、歓声を上げ甘酒をかけ合い、一年の悪病を退散させる行

事が行われる。昭和六十二年七月二十五日　秩父市教育委員会」と記され、奇祭「甘酒まつり」（甘酒こぼし）の由来が示されています。

一方、風土記稿の猪鼻の条に「猪鼻は白久村の内なれども、荒川を隔て一區をなし、すべて一村の體をなせり、古は白久組の内猪鼻村と唱へしと云、村名の起りは村内に巨岩ありて、其形猪の鼻に似たるより名くとぞ、武光庄に属す、・・・大岩二　各高一丈五六尺、形猪の鼻に似たり、村名の起り是に依る、」と記されていますが、残念ながら猪の鼻に似た大岩は未確認です。ここで昼食の休憩となりました。時折、霧雨が漂う中、地元会員から暖かい珈琲を頂きました。また、熊野神社の例大祭は奇祭「甘酒まつり」として知られますが、かつて地元会員が記録した勇壮な甘酒まつりの写真（2013 年 7 月撮影）を提供頂きました。

石仏・石碑群（724）

熊野神社（724）

奇祭「甘酒まつり」（724）

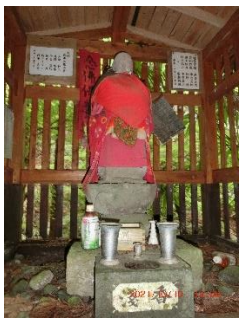
熊野神社登り口の石段の右側に、しめ縄が張られた大岩や多数の石仏（観音像や大日如来像など）・石碑等があり、猪鼻地区の信仰の篤さと歴史の重みが感じられます。風土記稿には「熊野社　例祭六月廿八日村の鎮守なり」とあり修験の記載はありませんが、熊野古道の中辺路コースには、熊野本宮近くに熊野九十九王子の一つである猪鼻王子があり、僅かですが熊野修験の関与も気になるところです。

社殿から降り鳥居前を右折（西方向）、秩父往還の古道を進むと国道 140 号に突き当ります。歩道のない国道を自動車に注意しながら歩き、国道が西から南に急カーブする場所は、旧大滝村と旧荒川村との境であった白滝沢で、国道右側に工事現場の広場があります。大滝村誌には「強石のにぎわい　旧秩父往還は白滝橋の手前から上強石へ向かい、杉の峠をこえて落合へ通じていた。これとは別に『三峯山道・新古両大滝道』が猪鼻からまっすぐ『石出し』を通過して（下）強石にいたる道があった。『石出し』という地名は、たえず石が押し出す（崩壊する）危険な場所という意味である。その頃の強石は岩石が屹立して通行困難なことで知られていた。家は四軒あった。」と記され、強石の地名の由来とも考えられます。また、猪鼻から上強石、杉ノ峠を通る秩父往還とは別に、猪鼻から下強石に至る道（三峯道？）があったことが示されています。

熊野神社境内での昼食　　石段横の石仏群（724）　　白滝沢の工事現場

標識はありませんが、白滝沢の工事現場の広場（現在の大滝トンネル入口の工事現場）の奥に旧秩父往還の入口があります。白滝沢の左岸の明瞭な道を登ると古道を横断して赤テープ（通行止めの意味か？）が張られていました。赤テープの下をくぐって登ると間もなく白滝沢（大滝村誌では猪鼻沢）に出ます。数年前の台風の名残なのか大雨による増水のためか、白滝沢に架かけられた橋が破損し、壊れた金属製の鉄梯子などが散乱していました。渇水期ならまだしも、増水期は渡渉に細心の注意が必要と考えられますので、古道歩きを楽しむ一般の愛好者が歩くには適さない状況にあると判断できます。

古道調査のために今回は白滝沢を慎重に渡渉して対岸に渡りました。明瞭な道を少し登った岩の上に、鬱蒼として薄暗い樹木に囲まれて、壊れかけた堂に覆われた土壇場地蔵を確認しました。傍らの説明板には「土壇場地蔵（ドタンバジゾウ）の由来　江戸時代、大滝村は天領でした。この場所は、秩父甲州往還沿いの大滝村一番地の入口です。そして、罪人の処刑場でした。罪人は土の壇（土壇場）の上で斬首されました。たとえ罪人と言えども死すれば仏界に入るので、地蔵尊を祀ってその霊を慰め『土壇場地蔵』、『首切り地蔵』と称し、お経、念仏を唱えました。この地蔵の背中には『念仏供養塔』と刻まれています。人々は地蔵尊の供養により、人生の土壇場（塗炭・トタン）の苦悩から救われます。　平成十六年九月彼岸」と記されています。かつての処刑場跡だったと伝えられる場所に、死者に対する地元の人々の供養の気持ちが表されています。



白滝沢（猪鼻沢？）の破損した橋　　土壇場地蔵全景　　土壇場地蔵（725）

また、大滝村誌には「土壇場地蔵　国道 140 号線沿い荒川村猪鼻との境の、左に大きくカーブする所から右手の山中に数分登り、猪鼻沢を渡ったところにある。大滝村一番地にあたる。名称の由来については二つのことが考えられる。一つは荒川村との境、大滝の末端という意味。もう一つは猪鼻側の伝説で、江戸時代には罪人の処刑場だったから、処刑された罪

人の霊をなぐさめるために、猪鼻の人々が安置した石仏だという。そのため別名『首切り地蔵』と呼ばれている。石仏の背中に『念仏供養塔』と刻まれている。」と記され、土壇場地蔵は猪鼻の住民による設置のようです。また、大滝村誌によると、白滝沢は猪鼻沢と記されていることから、猪鼻沢に修正したほうが良さそうですが、詳細は未確認です。

白滝沢に架かる作業道の橋も破損　　注意書き　　旧秩父往還の消失個所

土壇場地蔵までは明瞭な古道でしたが、この先「上強石」に向う旧秩父往還は不明瞭で踏み跡が消失しています。しばらく斜面の右左を古道探索しましたが、明瞭な古道が確認できませんでした。ただし、所々に石垣が残されているため、丹念に探せば古道跡が発見できるものと推測されます。また、杉の幹に「右 作業道 ⇒×　＊右は作業道です。通行できません。土壇場地蔵から左に点線で、至杉ノ峠」の注意書きが括りつけられていました。古道調査はここまでとして、元の道を引き返し国道 140 号に戻りました。

交通安全地蔵尊など　　馬頭観世音　　牛頭尊・七観音など

国道を強石方面に進むと左側に交通安全地蔵尊立像や馬頭観世音石碑・牛頭尊・七観音などの石仏が多数並んだ場所があります。大滝村誌に「強石の牛頭尊　猪鼻との境にある白滝橋を過ぎて、国道の坂道を登り切って右に急カーブするところの左側ガードレールの外側に数基の馬頭観音文字碑や石仏が並んでいるなかに、『牛頭尊』碑がある。村内にはたくさんの馬頭尊はまつられているが、牛頭尊というのはこのほかにない。」とあり、極めて珍しい観音文字碑とのことです。石仏群を過ぎると右手に強石への車道入口があります。国道端の標識「強石区」に従い右折すると、すぐ左側に高野林太郎顕彰碑（林学博士・本多静六撰幷書）及び強石げんきプラザがあります。その右奥が瀧石神社ですが、神社名が地名由来の強石ではなく瀧石なのに興味がひかれます。大滝村誌に「瀧石庄　『新編武蔵風土記稿』によると、新・古の二大滝村と三峰村は武光庄に属し、中津川村は滝石庄に属している。しか

し、いずれも『瀧石庄（たきいしのしょう）』と呼ばれたことがあるという。・・・慶雲四年（707），滝石荘（庄）は『大滝ノ荘』に改められ、文禄二年（1593）大滝の荘が『大滝村』になったという。」の記載があり、瀧石神社名は奈良時代にさかのぼる地名からつけられた可能性が高いものと推測されます。「秩父往還いまむかし」に「強石の地名は、ここより奥へ入るほど巨岩、険岩が多いところからおこった。・・・強石から杉ノ峠を越えて落合に至る秩父往還と、大達原を経て大輪へ至る三峰街道がわかれていた。」と記され、かつては交通の要衝として栄えた地区であったことが確認できます。

強石への分岐

強石げんきプラザ

瀧石神社

舗装された車道を上強石に向って登ると左手に道標「御岳山－強石バス停」があります。この道標は秩父往還が、上強石から杉ノ峠経由で雁坂峠・十文字峠に向う秩父往還と、下強石、大達原から大輪経由で三峯神社に至る三峯参詣道、との分岐と推測されます。今回はここを左折して下強石集落を通り、国道 140 号の手前を右折する三峯道を進みます。ほどなく右側に大滝発電所の巨大な送水管 2 本が斜面を下り、その上を古道が通っていました。

道標

大滝発電所の送水管

国道 140 号横の道標

国道 140 号に突き当たると道標「強石集落を経て強石バス停方面」・「大達原大輪方面 - 強石バス停方面」がありますので、歩いてきた狭い道が強石バス停に行く旧道とわかります。国道を右手に進むと国道に右側にある石段に緑のフェンスに「遊歩道入口」、道標「大達原方面」及び「大血川・大輪方面－強石方面」が設置されています。遊歩道を登る道が大達原を経由して大輪に向かう「三峯道」と推測されます。更に国道を進むと「光の村養護学校」が右手に現れ、標識「林道大達原線起点」のある林道が分岐しています。

標識「大達原方面」

光の村養護学校

林道大達原線起点

今回の古道調査はここまでとし、地元会員の車または光岩バス停から西武観光バスで三峰口駅にもどりました。

参考資料

○歴史の道調査報告書・第 11 集「秩父甲州往還」(編集・埼玉県教育委員会、埼玉県立博物館)、発行・埼玉県県政情報資料室、平成二年四月発行

○大日本地誌大系、新編武蔵風土記稿（第 12 巻）・秩父郡（白久村・贄川村）（雄山閣)、昭和四十六年二月二十五日発行

○明治 43 年測図 5 万分の 1 地形図「三峰」

○荒川村誌（編集・荒川村村誌編さん委員会)、発行・荒川村、昭和五十八年十二月二十八日発行

○大滝村誌（編集・秩父市大滝村誌編さん委員会)、発行・秩父市、平成二三年（2011 年）三月三一日発行

○幸田露伴著「知々夫紀行」(山の旅・明治・大正篇、近藤信行編・岩波書店)、2003 年 9 月 17 日発行

○飯野頼治著「秩父往還いまむかし」(さきたま双書)、平成 11 年 2 月 25 日発行

○飯野頼治著「地図で歩く秩父路」(さきたま出版会)、2006 年 12 月 10 日発行

○国土地理院（2 万 5 千分の 1 地形図）

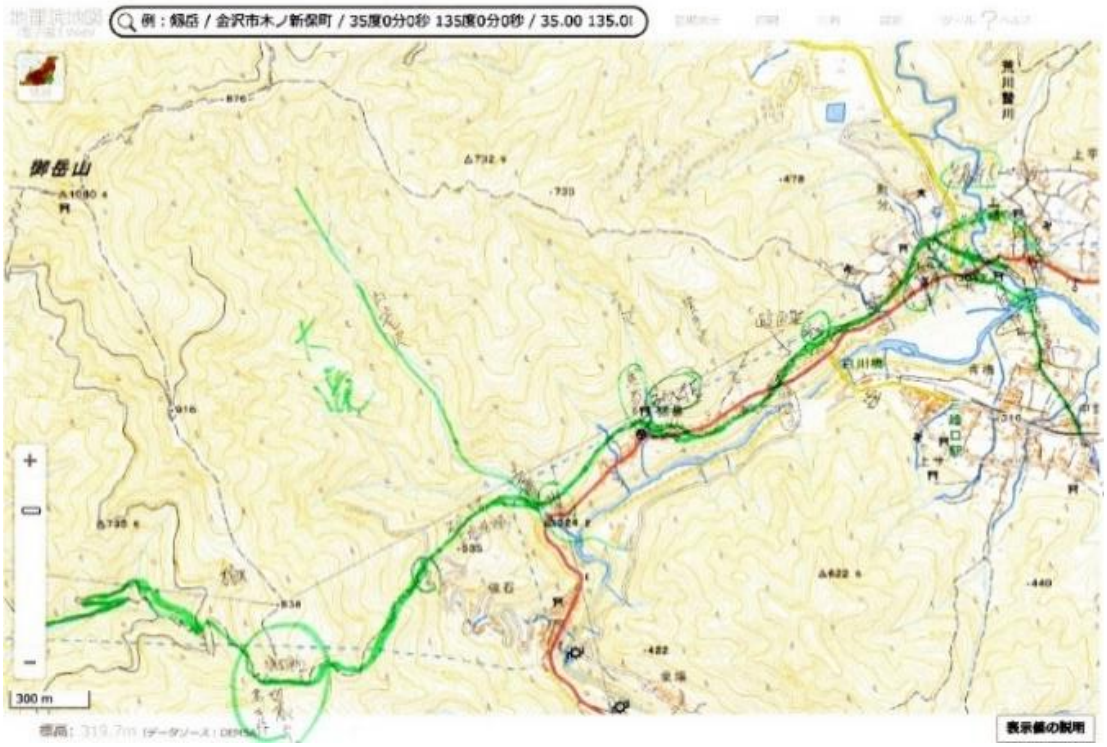
○YAMAP・GPS データ

贄川宿にて

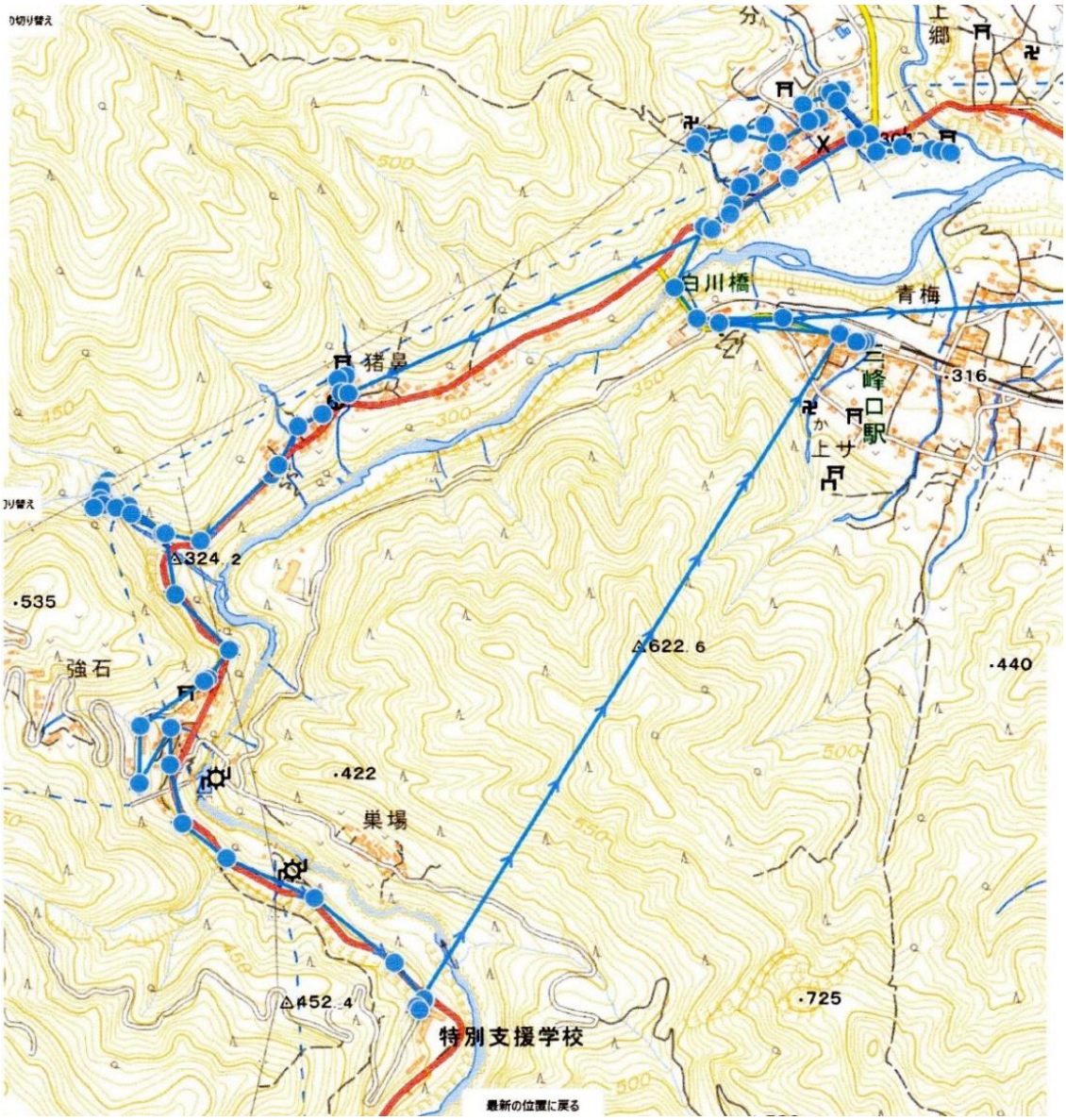
「八幡渡し」の坂

三峰口駅前にて

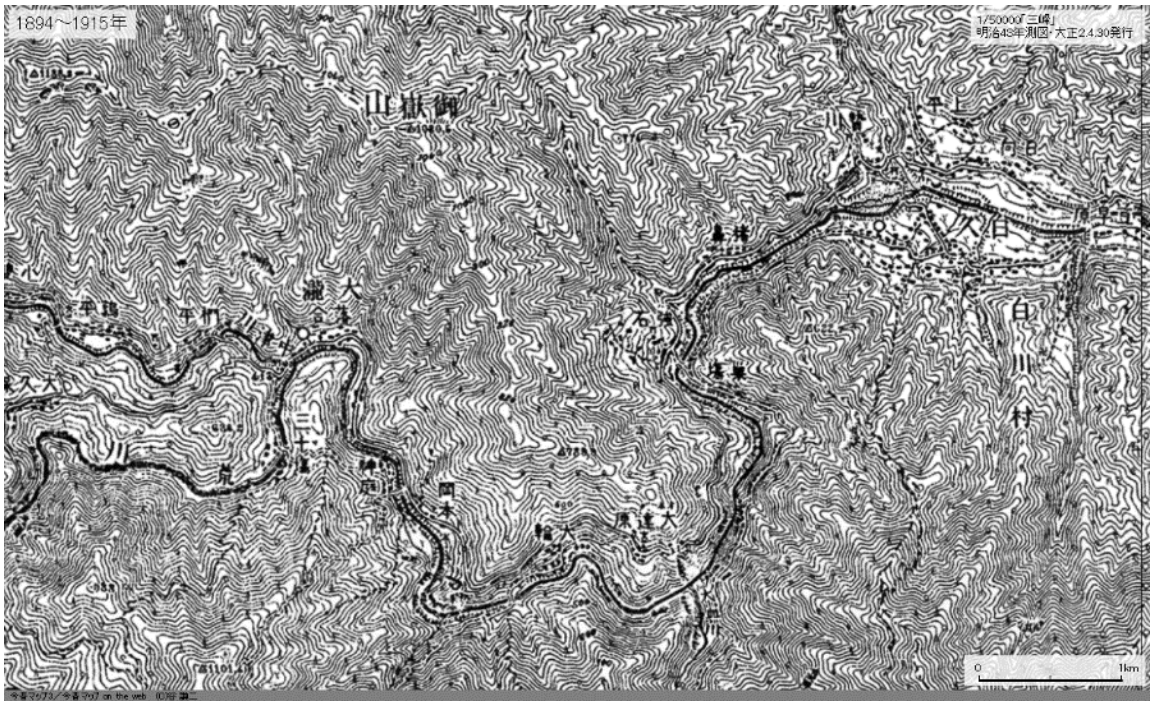
松本敏夫記



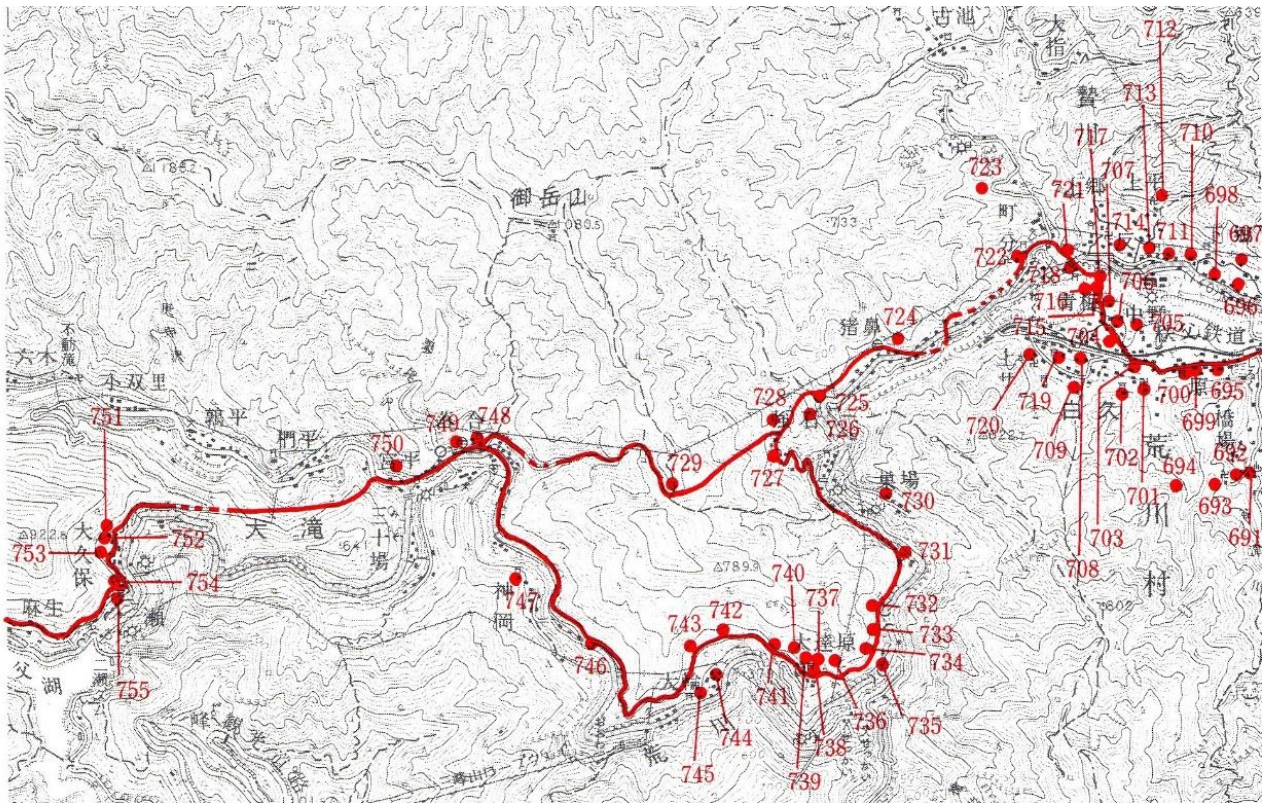
秩父往還の予想コース（国土地理院。2 万 5 千分に 1 地形図）



GPS による歩行記録（国土地理院（2 万 5 千分の 1 地形図）



明治 43 年測図・5 万分の 1 地形図「三峰」



歴史の道調査報告書・第 11 集「秩父甲州往還」（埼玉県教育委員会）より